

「海外駐在員配偶者女性」カテゴリーと自己性

——女性達の語りから——

立教大学大学院 三浦優子

1 目的

この報告の目的は、「海外駐在員配偶者女性」（以降、「配偶者女性」と記す）が、「配偶者女性」というカテゴリーのラベルを張られる中で、どのようにそのカテゴリーを受け止め、同じカテゴリーに属する女性たちをカテゴリー化しているのか、そして、カテゴリー化をとおして、どのように自己性を再確認し、新たな自己性を再編成していくのかを考察することである。また、帰国後に、「配偶者女性」カテゴリーが自己性にどのような影響を及ぼしているのかもみていく。

2 方法

そこで、データとして駐在員の夫に帯同して、ドイツのデュッセルドルフに4年から7年滞在し、帰国した女性3人（Uさん、Sさん、Iさん）のライフストーリーインタビューを用いる。3人の女性には、2016年（7月11月12月）に一人、2時間半から4時間のインタビューを行った。インタビュー内容は、子供時代から、学生時代、就職、結婚、渡独するまで、渡独後の夫・子どもとの関係、日本人やドイツコミュニティとのつながり、帰国後の生活など含めて自由に語ってもらった。インタビューの場所は、調査協力者宅近くのカフェで、許可を得てICレコーダーに録音した。

3 結果

分析の結果、語りから、女性たちは、渡独後、まず、「配偶者女性」カテゴリーを自分なりにとらえたうえで、そのカテゴリーに支配されるのではなく、独自の自己の在り方を再確認していくことが分かった。Uさんは、夫に頼る女性たちを「配偶者女性」カテゴリーでくくり、自分は、「できる女性」（夫にも頼らず、物事をひとりでこなす）であり、他者とは違うという気持ちを抱く。また、SさんとIさんは、日本人社会にどっぷりつかり、ドイツ語を学ぼうともしない女性たちを、「配偶者女性」カテゴリーのメンバーと捉え、自分たちを他の女性達と差異化していくことで、それぞれの自己性を再確認していく。Sさんにとり、現地の人々と深いつながりをもつことが大事で、それは、有難い経験だと語る。また、Iさんは、40代になり子育てが一段落したら、いずれは何か仕事をし、挑戦したいという強い気持ちをもっていたが、海外では、仕事ができないため、長男をドイツの学校に入れるという、別の形での挑戦を試みる。自分は、「できる女性」という気持ちでいたUさんだが、帰国後、仕事で輝いている大学の同期の女性達を目の当たりにして、「自分はただのおばさんでおわるのか」と焦りの気持ちに駆られる。また、Sさんは、「現地の人との暖かなつながり」という経験が、自己性に大きな影響を与え今までの友達との会話に違和感を覚え、Iさんは、社会とのかかわりが重要だと感じ、新たな挑戦として、学童やおもちゃコンサルタントの仕事始める。

4 結論

山田（1992：72）は「カテゴリーには、当該文化のイデオロギーを知らず知らずのうちにその成員に浸透させていくような『権力作用』が働いている」と述べている。「配偶者女性」カテゴリーも女性たちにとり、ある種の文化的イデオロギーをもたらすともいえるが、3人の女性たちは、そのような「管理」「支配」ともいえるカテゴリーの存在を可視化することにより、自己の在り方を捉えなおすことに繋がっていったといえる。そして、帰国後、海外において再認識された自己性は、女性達の生き方に大きな影響を与えているといえる。

文献

山田富秋, 1992, 「精神医療批判のエスノメソドロジー」 好井裕明編『エスノメソドロジーの現実』世界思想社, 70-87.